

石巻市小湊浜の震災復興過程における 活性化のプロジェクトの役割に関する考察

嶺岸 紀美彦¹・稲村 肇²・泊 尚志³

¹正会員 セントラルコンサルタント株式会社 東北支社技術第2部 (仙台市青葉区立町27-21)
E-mail:kminekishi@central-con.co.jp

²正会員 東北工業大学名誉教授 工学部都市マネジメント学科 (仙台市太白区八木山香澄町35-1)
Email:hajime.inamura@gmail.com

³正会員 東北工業大学准教授 工学部都市マネジメント学科 (仙台市太白区八木山香澄町35-1)
Email:tomari00@tohtech.ac.jp

東日本大震災から8年が経過し、被害の大きかった地域の中には、震災前の活気を取り戻せていない箇所がある一方で、復興を経て大いに活気のある地域も存在する。震災で甚大な被害を受けた小規模な漁村である石巻市小湊浜地区は、震災後には漁業を迅速に再開し、多数のプロジェクトを実施するなど、他の地域に見られない活発な独自の復興を遂げている。

本稿では小湊浜を対象とし、文献やインターネット調査、関係者へのインタビュー調査を通して、地域の文化の継承や同地域で実施された活性化のプロジェクトの震災復興過程における役割について考察することを目的とする。なお活性化を一意に定義することは容易ではない。本稿では、多数のプロジェクトが小湊浜で継続的に実施される中で、それらが地域にもたらした変化を捉えることに主眼を置く。

Key Words : 震災復興, 活性化プロジェクト, 小湊浜, 地域活性化

1. 序論

(1) 研究背景

東日本大震災から8年が経過し、被害の大きかった宮城県女川町や石巻市市街地では、町の整備の進行・産業の復活など、活気を取り戻されている。一方、同様に被害の大きかった石巻市牡鹿地区などでは、住人の減少や過疎化の進行、産業の縮小など以前の活気を取り戻せていない地域が、未だ多く存在する。2018年2月のネットモニターに対するアンケートでは、震災から7年が経過し、「自分の住む街の復興」について沿岸部被災者の22.0%が「改善している」と捉えている。また、29.1%が「悪くなっている」と回答し、沿岸部に住む被災者の暮らしの復興状況が震災から月日が経過していく中で、二極化されていることが指摘されている¹⁾。東日本大震災をはじめとした、災害の被害により、以前の生活、活気を取り戻せていない地域が多く存在することは、震災によってもたらされる大きな問題の1つである。

本稿で対象とする石巻市小湊浜は、被害の大きかった牡鹿地区の地域であるが、復興を経て大いに活気のある地域になっている。小湊浜は、震災後津波により甚大な

被害を受けた小規模な漁村でありながら、迅速な漁業の再開、多数のプロジェクトの実施、被害を受けた3つすべての民宿が復活するなど、他の地域に見られない独自の復興、活性化が進行している。また、牡鹿地区は主産業である漁業の就業者が特に多い地域であるが、漁業センサスの調査より、震災後、牡鹿地区の多くの浜では約半数の人々が漁業から離れてしまったことが明らかとなった。一方、小湊浜の漁業就業者の減少率は2割以下となっており、他の地域とは異なる特徴を持った地域であることがわかる。よって、震災後に独自の復興を見せた小湊浜の震災復興過程の行動を把握することは、災害による被害からの復興、地域の活性化につながる成功例の知見を残す意義を持ち、これからの災害からの復興や地域活性化を考える上で基礎的情報となることが期待される。

(2) 研究目的

本稿では、今後何処かで災害を経験することがある際に、暮らしの再建や地域活性化の際の参照となることを念頭に、石巻市小湊浜の震災復興過程における活性化のプロジェクトの調査を実施する。そして、その結果を用

いて、小浜浜における活性化のプロジェクトの役割を明らかにすることを目的とする。

小浜浜の復興の特徴である活性化のプロジェクトの役割を明らかにすることにより、災害からの復興、活性化の一因となる要素の理解を試みる。

本稿では、多数のプロジェクトが小浜浜で継続的に実施される中で、それらが地域にもたらした変化を捉えることに主眼を置く。

2. 研究の位置づけ

清野ら²⁾は、小浜浜における 2011 年 6 月から 2014 年 9 月の期間の都市農村交流による産業とコミュニティの再生の枠組みを検討することを目的とする調査を実施した。その結果、被災地を支援する地域外部の人々の活動が小規模な漁村集落の復興を後押ししていることを把握し、獅子舞の復活など以前の暮らしを重視する活動の持つ意味は大きいと述べている。

平島³⁾は、コミュニティにとっての獅子舞の伝承の意義、およびコミュニティの在り方との関係についてフィールドワークを通して明らかにし、獅子舞の今日的意義を考察することを目的に小浜浜で調査を実施した。その結果、獅子舞が復活できた大きな要因のは住民の強い思いと共に、ボランティアが獅子頭の搜索や制作に協力したことであると述べた。また、獅子舞はコミュニティの構成員の連帯感・一体感を強化し、コミュニティの存続を願う人々のアイデンティティの拠りどころとなっていることを明らかにした。

岡田⁴⁾は、地域経済学の視点から、東日本大震災からの復興をめぐる問題と地域再生の展望の検討を行っている。地域が形成、再生産される条件は、その地域の経済主体（企業、農家、協同組合、NPO、自治体等）が毎年投資を繰り返すこととし、復興・地域再生とは被災地の建造環境の復旧に加え、家族生活やコミュニティを含む社会関係の再生を意味し、経済的には地域内再投資力を担う被災者・被災企業の再生産活動の再開が鍵となることを示している。

敷田⁵⁾は、地域づくりでその役割が注目されているよそ者について、先行研究からよそ者の定義や特性を明らかにしたうえで、よそ者と地域との関係を考察している。よそ者が地域とかかわることで地域づくりが促進されたり、地域にないものを提供してくれたりするので、よそ者が活躍した例を挙げ、よそ者が持つ効果をよそ者効果として 5 つに整理した。

Aldrich⁶⁾は震災が発生した地域において、部外者を含む、短期間の活動以上に、被災地コミュニティの住民間



図-1 小浜浜の位置

の人々の信頼関係や結びつき、社会的ネットワークが、災害後の復旧プロセスの重要な要素であることを示している。

以上を踏まえると、地域再生、地域づくりには、地域の経済主体による継続的な投資や外部の人々であるよそ者の行動が関わっていると述べている。地域の活性化において地域内での様々な活動が大きな影響を与えていることが考えられる。また、震災からの時間の経過により、復興、活性化は大きな変化を遂げており、外部の人間の活動がもたらした影響や役割においても大きな変化を遂げていると考えられる。震災直後から二年ほどを対象に小浜浜の活動に関する地域外部の人々の行動についての研究や、獅子舞の復活の意義とそれに伴うコミュニティのあり方など、小浜浜で実施されている多種多様な活動の中での個々の活動に着目した研究は行われている。しかし、震災から現在までの多様な活動を横断的に分析した研究は行われていない。そこで本稿では震災直後から調査時点（2019 年 1 月）での、震災復興過程における小浜浜での様々な活動、行動を調査し、小浜浜における活性化のプロジェクトの役割の把握を試みる。

3. 研究対象地概要

(1) 研究対象地域

本稿の対象地である小浜浜地区は宮城県石巻市（2005 年の合併前は旧牡鹿町）にあり、牡鹿半島の南西部に位置する（図-1）。世帯数 196 世帯、人口は 470 人（2018 年 12 月末時点、隣接する給分浜を含む）で、牡鹿半島内では比較的規模の大きな地域である。

東日本大震災により、小湊浜の人口は753人（2010年9月末時点）から471人（2015年9月末時点）と減少した。集落の大部分が浸水し、家屋や漁業用の納屋、漁業道具、養殖施設、漁船など多くを失い、小湊浜で経営されていた三つの民宿はどれも営業ができなくなるなど壊滅的な被害となった。

主産業の漁業は古くから営まれており、第一種漁港である小湊浜漁港と給分浜漁港を有し、カキやワカメ、ノリの養殖、アナゴ漁などが盛んである。住民の多くが漁業関係者であり、比較的若い世代の男性が多いが、若い世代の市街地への移転や青年団のような存在である実業団の団員数の減少などの課題を抱えている。

(2) 研究対象地の特徴

小湊浜はいくつの特徴を有しており、それらが小湊浜の活性化に影響を与えた一因であると考えられる。

第一に、震災により甚大な被害を受けたが、震災後に浜での漁業を辞めた人数が他の浜と比べ少ない点である。これらは石巻市市街地から通いで漁業を実施する人が増加したことや小湊浜の人々が自主的に漁業再生に向けて地域を挙げて行動していたことが要因であると考えられる。一方行政による漁業支援も活躍した。小湊浜で実施された行政による漁業支援は複数存在し、多く活用された支援は、費用の9分の1のみ個人で負担する内容であった。しかし行政からの漁業支援の開始は震災直後に実施されなかったため、当初、小湊浜の人々は行政からの支援を期待せず、自身の力での漁業の再生を実施した。

第二に、震災直後から現在に至るまで、震災前には見られなかった多種多様なプロジェクト(表-1)が実施されている点である。これらは、近隣の似た地域では実施された例が見受けられず、特にこの地域の独自性の強い特徴である。

第三に、震災後に様々な団体、土地、人々が小湊浜の支援やボランティアに携わり、ネットワークが形成されている点である。小湊浜の活動はSNSやメディアなどで発信され、ボランティアに関わる人だけではなく、多くの人々に知られることになった。また小湊浜内でも震災の復興を通し、人々のつながりが強化されたとの意見は多い。

4. 調査概要

本調査は、3.で提示した、牡鹿地区内において、他の浜とは異なる独自の復興、活性化を見せる小湊浜で、活性化や地域の変容に多大な影響を与えたと考えられる活性化のプロジェクトの小湊浜での役割を明らかにすることを狙いとする。また、震災復興過程における小湊浜で

表-1 活性化のプロジェクト一覧

活性化のプロジェクト	
小湊浜通信 ²⁾ の発足	小湊浜復興地ツアー
五十鈴神社修復プロジェクト	小湊浜花火大会
桜畑寄席	獅子舞復活プロジェクト
小湊浜神輿復活バスツアー	小湊浜五十鈴神社夏祭り
金黄金山神社初巳大祭参加	
漁業再生、漁業支援	
小湊浜ふるさとプロジェクト	がんばる養殖プロジェクト
表浜漁業再生プロジェクト	

表-2 インタビュー対象者

小湊浜地区区長	牡鹿総合支所地域振興課 2名
小湊浜実業団現・前団長	小湊浜の民宿経営者 2名
小湊浜通信代表	牡鹿地区の保育所所長
アーキエイド発起人（震災後牡鹿半島の調査を実施）	

の活動を調査することも目的とした。

本調査では文献調査・インターネット調査に加え、これまで小湊浜の復興、地域活性化に携わってきた方々の中から、小湊浜での立場、役割を勘案し、小湊浜に異なる関わり方をしている、9名(表-2参照)にインタビュー調査を実施した。インタビュー調査により、小湊浜の震災直後から現在に至るまでの状況や、活性化のプロジェクトの情報収集を行う。

インタビュー調査を通し、各種活性化のプロジェクトから、小湊浜地域の人々の暮らしの再建と、地域の活性化に影響を与えたと考えられるプロジェクトを選定した。そこで選定された活性化のプロジェクトから小湊浜の暮らしの再建、地域活性化の要因の理解を試みる。様々な側面を持つ活性化のプロジェクトを、一様に理解するため、いくつかの要素によって整理を実施し、それぞれの活動が持つ特徴を明らかにする。整理を実施する要素は「プロジェクトの主体」、「キーパソン」、「活動の目的的变化」、「よそ者の行動」、「その他」である。これらの要素は、プロジェクトの発端となる存在やプロジェクトを動かしていく存在、プロジェクトが実施される要因となる目的、活動の中での出来事を明らかにし、他地域でこれらのような活性化のプロジェクトが実施される際に参照となることを見据えている。

5. 調査結果

インタビュー調査やインターネット調査を通し、小湊浜で実施されたプロジェクトにおいて、それぞれの活動が、様々な側面、意義を持っていることが明らかになった。

そこで本稿では、「小湊浜通信の活動」、「小湊浜花

表-3 小浜通信の活動

主体	小浜通信メンバー
キーパーソン	小浜通信前代表・小浜通信代表・実業団員
目的の変化	小浜の皆さんが自立しようとする姿を見守りながら、行政に行き届かない部分での後方支援を行う 友人として対等な立場から、小浜の人々の支援を続ける
よそ者の行動	支援団体である小浜通信を設立する。 様々な活動を実施する。
その他	BBQ の実施などよそ者と小浜の人々の交流の場の提供 小浜の支援の受け皿となり、プロジェクトの企画運営を実施 SNS を通し地域の繋がりや外部との繋がり強化、外部への情報発信 ボランティアの方々のネットワークの形成、継続的な支援の実施

表-4 小浜花火大会

主体	小浜通信・小浜通信代表の友人の花火師の方々
キーパーソン	小浜通信代表・実業団員
目的の変化	①復興の願いを込めて小浜に花火を上げたい ②折角ならもっと良いものが見たいと考え小浜浜内でも寄付が集まる ③地元根付いた小浜主体の行事にしていきたい
よそ者の行動	今まで小浜にはなかった行事を、小浜に持ち込み、実施した。
その他	皆が共通して楽しむことのできる場の提供 都心部から支援できる活動の場の提供 小浜の人々の自分たちが支える活動であることを認識し、自分たちが協力してより良いものへと導こうとした 小浜の人々の繋がり強化 小浜を通し、様々な場所への支援の繋がりが生まれ、交流の発生

火大会」, 「小浜獅子舞復活」, 「五十鈴神社夏祭りの神輿担ぎの再開」, 「漁業の再開」の5つの活動を小浜地域の人々の暮らしの再建と、地域の活性化に影響を与えたと考えられるプロジェクトとして選定し、それらの活動の整理を実施した(表-3~表-7参照)。以降にその結果を述べる。

6. 活性化プロジェクトの役割の考察

本章では小浜の震災復興過程で実施された活動から、暮らしの再建、地域活性化の要因の理解を試みる。小浜で実施された活性化のプロジェクトは、現在の小浜の活性化に様々な側面において、多大な影響を与えているものであると明らかになった。では、小浜で震災復

表-5 小浜獅子舞復活

主体	小浜通信・小浜実業団
キーパーソン	小浜通信前代表・実業団員
目的の変化	①津波で流されてしまった村の伝統である獅子舞の復活 ②小浜の誇りを復活させることで精神的な支柱としたい ③獅子舞文化の継承
よそ者の行動	資金収集の補助
その他	獅子舞復活資金のための助成金申請等の提供 区長(当時)による住民アンケートの実施による問題意識の共有 地域の誇りの復活による小浜を離れていた人が訪れる契機となった

表-6 五十鈴神社夏祭りの神輿担ぎの再開

主体	チーム出張寄席・小浜実業団
キーパーソン	チーム出張寄席・小浜通信代表・実業団員
目的の変化	①どんな形でも神輿担ぎを再開させる ②人の手で担ぐ神輿担ぎを再開させる ③多くの神輿を担ぐ人を集めて、完全な形での神輿担ぎを実施する
よそ者の行動	小さな地域のお祭りを人が集まるイベントへと昇華させた。
その他	定期的に寄席を開催しによる交流の場の提供、地域の人から認知される 小浜全体が参加し、共通して楽しむことのできる場の提供 日程の変更の実施、「やれることがあるならやる」という考えを持つ

表-7 漁業の再開

主体	地域全体・行政
キーパーソン	小浜の漁業に関わる方々
目的の変化	①何もしないよりは少しでも収入を得る ②震災被害を受けても生きる道があることを示す ③これからも小浜で生きていく
よそ者の行動	漁業支援によるサポート アルバイトやボランティアによる支援
その他	皆が漁業再開に向けて動きだしたことにより希望が湧く 小浜の生活そのものである漁業の再生による誇りの復活 生業の再開による生活の再建

興過程に実施された活性化のプロジェクトが小浜においてどのような役割を持ち、小浜に影響を与えたか、5.で整理を実施した5つの要素ごとの考察を行った。

(1) プロジェクトの主体

小浜での殆どの活性化のプロジェクトの主体は小浜浜内の団体と、小浜浜外の人の複数が携わっていること

が明らかになった。

漁業再生においては、当初小湊浜の漁業に関わる人々が主体となっていたが、行政からの支援の開始後は小湊浜の人々が上手く外部を活用していた。

花火大会においては、小湊浜通信の代表が主体となっているが、何度も実施していく中で、小湊浜の人々の寄付が集まるようになり、協力関係が築かれつつあることが分かった。今後、小湊浜の人々がより協力するようになることで、成熟したプロジェクトになることが予想される。

よって、活性化のプロジェクトにおいて主体となる存在は、その地域の地域を動かしている存在と、外部から親身になって、継続して支援を行ってくれる存在が必要であることが示唆された。

(2) キーパーソン

(1)で提示した通り、活性化のプロジェクトを実施していく主体は、小湊浜の人間と外部の人間の協力で成り立っている。そこから、キーパーソンとしての働きを持つ存在は、小湊浜の人間と外部の人間のどちらもが必要であることが明らかになった。

またキーパーソンは、主体となる小湊浜の団体と外部をつなぐ役目であることが考えられる。小湊浜通信は前代表や現在の代表が、小湊浜を訪れ、同等な友人のような立場として支援を実施したため、現在までプロジェクトが実施されている。キーパーソンは無理のない範囲で継続的に、活動に関わっていくことがプロジェクトを成り立たせるうえで重要であることが示唆された。

(3) 目的の変化

多くのプロジェクトが、当初の目的から進行していく中で目的が変化を遂げていることがわかる。当初の目的は、先ず目の前にある課題を達成することを目的としており、自身の生活の再建や、無くなってしまったものを再生することが多く見受けられる。しかしプロジェクトが進行していく中でそれらをより良いものへと変化させていくことを目的としている。それらが達成されると、これからの未来や、将来など先を見据え、継続させていくことを目的としている。

活性化のプロジェクトの持つべき目標は、先ずは、目の前の課題をクリアすることを考え、そこでは終わらずにより良いものへ進化させることを考え、最終的には、プロジェクトを継続していくことを考えるべきであることが示唆された。

(4) よそ者の行動

小湊浜で実施されたプロジェクトは殆どがよそ者と小湊浜地域の人々が協力し合い実施されている。実施され

ているプロジェクトは、よそ者の押し付け的な支援ではなく、地域の人々が何を必要としているかを、共に考え、理解したうえで行われているため、地域の人々からも受け入れられていると考えられる。また、すべてのプロジェクトが地域や組織の変容の促進に役立っており、活性化のプロジェクトは、小湊浜に外部の視線が入ることによって、小湊浜の変化を促したと考えられる。

(5) その他

活性化のプロジェクトが、小湊浜にもたらした影響は多数存在する。しかしそれらは当初目的とされていたものだけではなく、プロジェクトが進行していく中で、効果が波及していったものであることが明らかになった。震災直後はボランティアなど外部の人々から、直接的な支援や、知識の提供を受け、生活の再建がなされた。復興が進む中で、プロジェクトを通し、小湊浜内のコミュニティ、外部との人間、土地とのネットワークが強化された。現在は、友人関係のような同等である立場として、継続した活動がなされている。活性化のプロジェクトは、小湊浜の人々と外部の人間を友人のような同等な立場へと変化させ、継続的な活動を誘発したことが、小湊浜の活性化に影響を与えたと思われる。

7. 本稿の成果

本稿では、独自の復興、活性化を見せる石巻市小湊浜で、震災復興過程における活性化のプロジェクトの調査を実施し、活性化のプロジェクトの役割を明らかにすることを狙いとしたうえで、以下のことを明らかにした。

- ・ 活性化のプロジェクトは、キーパーソンを核として、プロジェクトの主体となる小湊浜の人々と、外部の人々の交流の場を提供し、親交が深まることで、共同で活動を実施する体制を整える役割を持つ。また小湊浜の人々と外部の人が、友人関係のような対等な立場でいることが、活動を継続するうえで重要であることが示唆された。
- ・ 活性化のプロジェクトを開始する段階では、災害被害からの再生を目的に活動を開始し、生活の再建を促す役割を持つ。小湊浜では、プロジェクトを再生させた時点で活動を終了させず、小湊浜の人々と外部の人が継続し活動を続けたことにより、復興を経て大いに活気のある地域へと変化した。よって、地域内外の協力を続け、活動を継続し、生活の再建、地域の将来を見据える役割を持つことが示唆された。
- ・ 小湊浜の人々は「外部の人がここまでやってきているから、自分たちもやれることがあるならやる」と心境が変容していった。よって、活性化のプロジェクト

エクトは、地域の組織や人々の変容を推進する役割を持つ。支援を受ける地域の人々は継続的な活動によって心境が変容していくことが示唆された。

本稿は、小湊浜の 5 つの活性化のプロジェクトに焦点を当て、調査を実施した。今回の調査でインタビューを実施した 9 名以外にも活性化のプロジェクトに関わる人や、小湊浜の活性化に影響を及ぼしたと考えられるキーパーソンが存在する。それらの地域外の人間がなぜ小湊浜への継続的な支援を実施するのか。また牡鹿地区内の他の地域との比較調査を行い、小湊浜の特徴を捉えることが今後の課題である。

参考文献

- 1) 河北新報オンラインニュース：〈震災 7 年ネット調査〉格差是正 細やかな支援を, (年号と URL) .
- 2) 清野隆：農山漁村における震災復興 - 都市農村交流による産業とコミュニティの再生, 日本観光研究学会, Vol.24, No.1, pp49-52.
- 3) 清野隆：東日本大震災後の漁村集落における都市住民による被災地支援の意義 -石巻市小湊浜における民間団体の取組みを事例として-, 日本観光研究学会全国大会学術論文集, Vol.27, No.27, pp.289-292, 2012.
- 4) 清野隆：東日本大震災後の漁村集落における復興プロセスに関する調査研究：その 3 小湊浜集落における都市住民による再建支援, 農村計画学術講演梗概集, pp71-72, 2014.
- 5) 平島朱美：日本のコミュニティにおける獅子舞 伝承の今日的意義, Vol.13, pp92-121, 2016.
- 6) 岡田知弘：震災からの地域再生と復興事業の課題, 学術の動向, Vol.18, No.10, pp9-13, 2013.
- 7) 敷田麻実：よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究, 国際広報メディア・観光学ジャーナル, Vol.9 pp79-100, 2009.
- 8) Aldrich, D.P.: The power of people: social capital's role in recovery from the 1995 Kobe earthquake Natural Hazards, Vol.56, pp595-611, 2011.